

外国人が住みたいと思う 魅力ある日本をめざして

—アレックス・カー氏を囲み、
その著書『犬と鬼』をめぐる対話—

2002年10月11日(金)、六本木・国際文化会館において「アレックス・カー氏を囲んで」の会が開催されました。様々な分野の皆様にご参加いただき、現在の危機に陥った日本の問題を我がこととして捉え、カー氏の近著『犬と鬼—知られざる日本の肖像—』(講談社刊 原題:Dogs and Demons)をめぐるカー氏と対話の機会を持つと、弊社が主催したものです。

アレックス・カー氏は以前からお親しくさせていただいており、当ヴィタリテにおいても24号巻頭インタビューの中で、日本の美についてお話をいただいたことがあります。カー氏は、父君の仕事の関係で12歳のときに来日し、その後エール大学、オックスフォード大学で日本と中国について学ばれ、京都の亀岡市にしばし居を構えておられたこともあり。東洋の古美術についても造詣が深く、日本の伝統文化に対しても並々ならぬ慧眼をお持ちです。94年に『美しき日本の残像』(新潮社刊)で新潮学芸賞を受賞し、その中で失われゆく日本の美について記され、大きな反響を呼びました。

ヴィタリテ41号で徳山二郎氏の著書をご紹介させていただいた折に、カー氏の著書『犬と鬼』についても軽く触らせていただきました。アメリカ本国にて刊行後、『News Week』誌でも取り上げられ、氏の日本に対する鋭い視点を軸に展開される新しい日本論が高い評価を得ています。この誌上では、カー氏と参加者の皆様が交わされた対話のごく一部しか紹介することができませんが、『犬と鬼』はカー氏が完成までに6年という歳月を費やされた力作ですので、ぜひ多くの皆様にご購入いただければ、ご本人も大いに喜ばれることと思います。

また、今回ご参加いただいた皆様にも、この場をお借りして改めて感謝の言葉を申し上げます。

*

Mr.カー: 今回『犬と鬼』の中で色々書かせていただきましたが、出だしは自然環境の破壊です。以前『美しき日本の残像』を出版していただきましたが、どこかで疑問が残ったままだったのです。自然環境の破壊というものは、近代化をめざしたこの先進国でもやってきたことであり、私は単に昔の日本を懐かしむロマンチストなのではないかと。そこで日本をじっくり研究しようと考えました。そのとっかかりが自然環境の破壊であり、また今でも私が一番憂いている問題



『犬と鬼』
講談社 本体 2500円

でもあります。

Mr.崎山: 著書の中で電話線や電線を地下に埋めていない先進国は日本だけであることや、コンクリートばかりの日本について厳しく指摘されていますが、実は今まで全く意識していませんでした。これは私だけでなく、多くの日本人に電線やコンクリートを気にする視点が欠けているような気がします。

Ms.山浦: 私は千葉大学の園芸学部を卒業したのですが、農家に研修に行って以来農家の方々と親しくおつき合いさせていただいています。そこで感じるのは、農村の崩壊が現代のコンクリート社会を生み出してしまった大きな原因であるということです。農家の方々は、サラリーマンはなんとなくきれいで立派な生活をしているように感じ、都会人に対してコンプレックスを抱いています。農家の人間としての誇りや自信を失ってしまっているのです。それが若者の離農を促し、つとより早くコンクリート事業に手を出すきっかけとなっているように思います。

Ms.剛: 農家の方々だけでなく、日本国民全体が日本人としての誇りを失っているように思えます。そして子供にそれを与えることができなかった私たち世代の責任をとても感じます。

Mr.伊藤: 日本の教育、特に小学校教育にも問題があると思います。戦前は、ちょっと郊外に出れば美しい風景が広がっていて、農家の人も自分の生活を楽しんでいました。戦後の日本の教育現場では、「個」の価値観の確立が疎かにされ、小学校の子供までもが権威の刷り込みのように校長先生は偉いと信じてしまっているような状況があります。個人としての価値観や誇り、自信といったものが育たない環境にあるのです。

Mr.カー: ブライドは大きな問題の1つであり、日本だけでなくアジア全体の問題としても広がっています。そこには文化ショックというものがありました。西洋社会では、ゆっくりと産業革命が進んだため、古いものと新しいものを融和させていく知恵を身につける時間的余裕がありました。しかし、アジアではあまりに突然産業革命が起こり、その知恵を身につける時間がありませんでした。衣服にしても建物の様式にしても全てが西洋からきたものであり、そこに文化的な断絶感が生じたのです。アジア全体で、自分たち本来の文化にはどんな価値があったのか、もしかしたら西洋文化の方が勝っているの



ではないかというコンプレックスが生まれてしまいました。特に日本は戦後すぐに産業革命が起こり、製造業が国の第一目標となったために、行政、教育、文化、果ては街並みまで、全てがそのために犠牲になりました。その結果、古いものを汚い、恥ずかしいと感じるようになってしまったのです。東京オリンピック開催の年に、京都の街が「近代的」であることを証明するために京都タワーができたことなどは、典型的な例だと言えるでしょう。そして、古いものは汚いままだ残しておくか、あるいは壊して工場のような街並みを造るか、極端な選択肢しか残らなくなってしまったのです。

日本は観光産業という産業においては失敗したと言われています。京都は経済発展の名の下に京都を破壊しましたが、結局それが観光産業という大きな産業をだめにすることになりました。中国などの大国が徐々に豊かになり、何千万人という人間が旅行を開始した現在では、外貨稼ぎという基準で計ると、実はコンピューターや自動車よりも大きな産業なのです。アメリカやフランスなど多くの先進国が、観光産業で潤っているのです。残念ながら、観光資源をだめにしてしまった京都は現在経済的に非常に停滞している状態です。

Mr.伊藤：私は京都で生まれ育ちました。竹内栖鳳（※1）は私の祖父にあたるのですが、京都の嵐山にある竹内栖鳳記念館が現在経営危機に陥っており、競売にかけられています。なんとかしようと娘とともに色々対策を考えたのですが、法的な面でなんの措置も講ずることができないのです。全てお金の問題だけで動いていってしまいます。京都市や京都観光局に相談しても関係ないと言うだけです。

家内の祖父が都ホテルの初代社長だったのですが、現在都ホテルは近鉄グループの傘下に入り、今の形へと改装されました。カーさんも随分と都ホテルを批判されていますが、以前の都ホテルはとても京都の街並みに馴染んだ建物でした。そして家内の実家は、この都ホテルを模して造られた洋館だったのですが、結局相続税でどうにもならなくなり売却しました。それをまた不動産業者がつまらないものに変えてしまったのです。古いものをどうやって新しくしていくのかという技術を身につけられなかったことは、まさに京都人の失敗だったと思います。

Mr.尺田：日本の田舎とアメリカの田舎を比較しても、アメリカの田舎は明るくてみな生き生きと暮らしているような印象を受けますね。

■ 参加者氏名（敬称略・順不同） ※○は第二部夕食会のみご参加の方です。

青野 恵子 / あおの・けいこ ざくろギャラリーー 一穂堂 社長
 石田 民雄 / いしだ・たみお 有限会社石田ライティング 代表取締役
 伊藤 朗 / いとう・あきら 日本ハンドベル連盟理事長（元青山学院初等部部長）
 内田 洋志 / うちだ・ひろし 中央大学総合政策学部
 小野 隆彦 / おの・たかひこ 早稲田大学空間科学研究所客員教授
 木原 晋一 / きはら・しんいち 経済産業省
 剛の ゆり / こう・のゆり 主婦（伊藤朗先生御令嬢）
 嶋山 浩司 / さきやま・ひろし ニスコンサービス株式会社役員
 尺田 可規 / しゃくた・よしき 株式会社SQUARE 代表取締役・一級建築士
 日野 晋 / ひの・すすむ 国土交通省 住宅局住環境整備室室長
 日原 行隆 / ひはら・ゆきたか 有限会社エス・エフ・プラン 代表取締役
 広中 和歌子 / ひろなか・わかこ 参議院議員
 本田 真美 / ほんだ・まみ 財団法人 日本腎臓財団
 本田 文子 / ほんだ・ふみこ ピアノ講師（横山サト子様御友人）
 松田 正允 / まつだ・まさみつ 東京不動産ネット株式会社 顧問
 松原 仁 / まつばら・じん 衆議院議員
 武藤 正 / むとう・あきら 株式会社東栄 常務取締役
 山浦 晶 / やまうら・あきら 千葉大学医学部脳神経外科教授（元院長）
 山浦 牧子 / やまうら・まきこ 主婦（山浦晶先生御奥様）
 横山 敏一 / よこやま・こういつ 立教大学日本文学科教授
 横山 サト子 / よこやま・さとこ 主婦（横山敏一先生御奥様）
 ○ Nils Hornmark / ニルス・ホーヌマルク ホーヌマルク株式会社 社長
 ○ 江戸 京子 / えど・きょうこ 財団法人 アリオン音楽財団 理事長
 ○ 加藤 且行 / かとう・そゆき 公認会計士・税理士
 ○ 佐々波 楊子 / さざなみ・ようこ 慶応義塾大学名誉教授
 ○ 西川 高幹 / しかわ・たかみき アンダーソン・毛利法律事務所
 ○ 三國 五百枝 / みくに・いおえ エヌ・シー・ジャパン株式会社
 （計27名）

■ モデレーター： 佐多 保彦 株式会社東横機 代表取締役社長

金銭的な面でもどちらが恵まれているのかというと、やはりアメリカです。それは国の施策として、日本では地方で豊かに暮らせるような仕組みが作られてこなかったということがあります。その上、日本ではお金を持っても懐み深く生きていかなければならないという風潮が未だに根強い。これは都会でも同じです。その結果、文化的なものにお金が流れないという矛盾が生じます。

Mr.日野：日本人はプライドを持ったり持たなかったりと揺れているところがあって、場合によっては変な自信を持ってしまう傾向がありますね。自分たちは非常に優秀な民族であり、美しさについても他の国と比べて優れた感受性を持っているというように。ただ現実を見ますと、先ほどお話にも出た電話線や電線のように、私たちは普段その存在を意識せずに生活しています。指摘されるまで誰も気づかない。

私は国土交通省で住宅関係の仕事をしているのですが、街並みに関しても、まず日本人は街並みを無視した家造りをする傾向があると実感しています。10年先、あるいは自分が死んでしまった後の50年先のことで考えて家を造ってくださと呼びかけなくてはいけないと思うし、またそれをチェックするようなシステムが必要だと感じています。

また役人の1人として発言させてもらえば、役人は一生懸命やろうと思って仕事をしていることは事実です。ただ、「和をもって尊し」



の精神といいますが、それが結局様々な利害関係をうまくごまかしてなんとか1つに収めようという姿勢でやってきたところがあることは否定できません。

Ms. 青野: 私の自宅の近くでも、幼稚園児が1人通園するので車が通る場合の危険を考えてポールを立てたいと、役所から電話がありました。街の景観などを考えずに、「安全のため」と言われると行政はただそのまま動いてしまうのです。今は地方に行ってもどこもかしこもフェンスが張っており、とても汚く感じます。

主人の仕事の都合でアメリカに住んでいたことがあり、時々日本人のご家庭にご招待されてお伺いする機会がありましたが、折鶴がぶらさがっていたり、五円玉で作った亀の置物があったり、全く無秩序なのです。日本を代表するような方々が、あまりに日本の文化に無頓着という気がします。むしろ、日本にきている貧しい外国人留学生の方が、お金をかけずに上手に部屋の中を日本のものでコーディネートして楽しんでいます。

Mr. カー: ごみごみ、ごちゃごちゃしている街に住んでいると、感受性も麻痺してくるのですね。私はやはり日本人ほど感性が豊かな民族はないと信じているのですが、感受性の麻痺というのは現代の深刻な問題です。ただ、意識的には麻痺していますが、どこか心の中では文化的なものに餓えているのだと感じることが多々あります。

Ms. 青野: 日本人の言葉も乱れてきていて、語彙も少なくなっていますよね。カーさんの著書の中でも、『「かわいい」潰けの日本』という記述がありましたが、私が経営しているギャラリーでも、スタッフが展示する作品を手にとるたびに「かわいい」を連発するのです。若い子だけでなく年配の人までがそうです。しかし、先生が丹誠を込めて作られた作品を「かわいい」と表現することは、貧しい発想だと思うのです。そこで、私のギャラリーでは「かわいい」という言葉は禁止し、他の言葉で感性を表現するように指導しています。

最近の若い女性を見ていると、エステに行ってネイルアートをして、お昼は高いものを食べに行き、そしてしまいはデパ地下でお惣菜を買って帰るということになります。そのような女性たちが母親になったときに、どんな子供たちが育つのだらうと心配になります。カーさんの目には日本の女性はどのように映っているのでしょうか。Mr. カー: 日本女性は両極端ですね。ある意味で男性がしばられているしきたりから自由な社会的立場にあるので、柔軟性があります。NPO団体のリーダーは女性の方が多いですよ。また芸術の世界で活躍されている方もたくさんいらっしゃいます。ただ、残念ながら



社会的仕組みや女性教育の面で古いシステムがそのまま残ってしまっているため、女性を幼稚にしてしまった部分も大きいでしょう。女性問題も日本が抱える課題の1つと言えます。私は現在1年の半分以上をタイで過ごしているのですが、タイの女性は銀行や大企業の社長など、とても高い社会的地位にある方が大勢いらっしゃいます。Mr. 日原: バブル時代について少々触れさせていただきます。私は長年静岡銀行に勤務していましたが、静岡銀行はアメリカのムーディーズの財務格付けで、現在日本でトップの銀行となっています。静岡銀行の礎を築かれたのが平野繁太郎氏ですが、在職中は「役人の言うことは一切聞いはいけない」という姿勢を貫いた方です。田中角栄氏が大蔵大臣だったころ、静岡銀行には未だ1人も大蔵省から人が入っていないということで、2度にわたって直々にお話が合ったそうです。しかし2度とも平野氏は拒否されました。しまいは、田中大臣から握手を求められたそうです(笑)。

また、既に関長職にあられたときに、バブル真っ只中の時代であったにもかかわらず、都内のノンバンクに貸し付けていた資金を回収しなさいと指示しました。平野氏は昭和の大恐慌を経験されていたので、そろそろバブルもはじけるかもしれない危機感を抱かれていたようです。そして回収した資金を地元静岡の中小企業に注ぎ込みました。誰がなんと言おうと自分の信じた道を行くという、明治時代の人間の気概というものを感しました。そして同時に、自分の足元を常に見据えた経営のあり方というのが、最も大切なのだと感じました。

Mr. 松田: バブルがはじけて日本がなぜこのようになってしまったのかと考えると、やはり経営者に責任感というものがなくなってしまったことがあると思います。いわゆる護送船団方式の下に、失敗しても表沙汰になることなく、経営者も責任を追及されずに済む銀行の仕組みというものが出来上がってしまいました。これは他の業界にも言えることです。戦後日本らしさを破壊していくことで日本は発展しましたが、そのつけが回ってきているのだと思います。

私は第二次世界大戦のときに小学校3年生だったので、戦中も戦後の記憶もあります。終戦の年の日記を見ますと、既に「公用語は英語にしよう」という意見が出されていたことが分かります。日本は過去のを全て捨ててはいけないうことで、まず形あるものから失っていきました。例えば、お正月もそうです。現在は神社にお参りに行って、そしてあとは履正月です。昔ならこんなことは考えられませんでした。しかしそのような動きを助長し、むしろリードしたの



が行政だったと思うのです。今の日本の問題というのは、歴史的な流れの中に必然としてあったのではないのでしょうか。

Mr. 横山: ここまでの話し合いを見てみますと、日本のどこが悪かったのかということを論じることに終始していますが、未来に向かってどうしていくべきなのかを話し合うことも必要なのではないのでしょうか。まず、カーさんにお伺いしたいのですが、日本の文化を「よい」とおっしゃいますが、具体的にどこが「よい」のでしょうか。言葉で表現することは簡単なのですが、実際それを本当に分かっている方がどれだけいるのか疑問に感じているのです。

Mr. カー: 日本に限らずあらゆる国の伝統文化を「よい」と考えています。なぜなら、文化には何百、何千年と磨き上げてきた精神的な知恵があります。それこそ、哲学、人との相互関係、霊界に対しての思いまで全てが文化の中に潜んでいます。なぜ文化や伝統というものを学ぶのかといえば、そういうものに触れることで、人間性や高貴な心というものが身につくと考えているからです。

Mr. 武藤: 平野繁太郎氏のお話を伺って思い出したのですが、先日ある人と話をしていて、「どうも最近の日本にはリーダーとなるべき大人物がいなくなりました。日本人の心から『卑怯』とか『やましい』といった言葉がなくなりましたからではないか」と聞いてはつとしました。カーさんがおっしゃったように、やはり文化には高貴な心というものが根幹にあるのだと思うのですが、結局今ある様々な問題というのが文化の喪失に起因しているのではないのでしょうか。

Mr. 山浦: 私は横山さんに同感なのですが、やはり確認作業ばかりをしていたのでは、将来の展望へとつながりません。私は病院長として長くやってきましたが、院内でもヒューマンエラーというものが絶えず起きています。しかし人間である限り必ず犯してしまうミスというものがあふ、エラーを犯した人間ではなく、エラーがそのまま突っ走ってしまった環境を問題にすべきです。環境破壊が日本人が犯したエラーの1つであるならば、誰がエラーを犯したのかを追及するよりも、エラーがそのまま突っ走ってしまったシステムそのものを見直すことも必要なのではないかと思ひます。

Mr. カー: 私は『犬と鬼』の中では、あえてこれからどうしたらよいのかという具体的な提案を一切していません。外国人が日本に関する記事や本を出すと、えてして「あーしろ、こーしろ」という押しつけ論になりがちです。今の日本をそのまま鏡のように映し出し、その現状を認識していただくことで、自然と日本の中から解決策が出てくるのではないかと期待しているのです。今とても日本的だと思われて



いる金融界のやり方などは実は歪んだ形であつて、例えば静岡銀行の平野氏が行った経営のように、純粋な日本人のやり方を取り戻せば日本は再生するかもしれません。

Mr. 内田: この中では唯一の学生ですので、学生という立場からお話しさせていただきます。現在所属しているゼミの仲間、カーさんの著書を読んでもらって意見を聞きました。やはりほとんどがここに書かれている日本の現状について知りませんでした。そして一番問題だと感じたのが、そのような現状をどう思うかと聞いたときに「関心がない」という返事があったことです。授業の中でもまず「グローバリゼーション」という言葉が取り上げられ、世界のスーパーパワーであるアメリカに追いつけ追い越せということで、どうしても学生も海外に目が向きがちです。

Mr. カー: それは非常に逆説的な意味を含んでいると言えます。日本は長い間国際化、国際化と言ひながら結局そうはなりませんでした。京都の街並みを現代的にしたから国際的になったかといへば、そうではなかったですね。つまり、京都らしさを失ったことで、逆に国際的には価値のないものになってしまったわけです。日本の伝統文化や自然破壊の問題について興味があるというのが真の国際人です。それらのものに無関心な人間がいくら勉強をしたところで、世界に出たときに国際人としては認めてもらえません。日本の大学の誤解はここにもあるのではないかと思ひます。



Mr. 小野: 私は昨年の4月から早稲田大学の客員教授をしています。現在早稲田大学の中では改革が進められています。その1つに社会人学生の受け入れがあります。私が所属している研究所は学部と全く関係のない、いわゆるプロジェクト研究所で、独立採算制の形をとっています。そのため、あらゆる学部から学生や社会人学生が集まてきます。社会人学生は様々な目的意識を持って集まてきますので、そこから学内の意識も変わてきます。また、



研究所も独立採算制ということで、スポンサーに対して責任を持って研究を行いますし、また私たちも真剣に取り組んでいます。このように、少しずつではあるものの、大学のあり方にも変化が出てきています。

Mr. 横山: 私は立教大学で教授をしています。私の授業に出てくる学生は非常に熱心です。人間は落ち始めると、もっと深いところにある普遍的・潜在的な意識が目覚めてくるのです。それをいかに問答で語り合い、一緒に実行していくかということが重要なのだと思います。4年ほど前から、「タバコのポイ捨て絶滅運動」と称して、キャンパス内のタバコの吸い殻を拾って歩いているのですが、どんどん学生が集まってきて彼らが率先して動きます。私が教えられることの方が多いくらいです。むしろ、教授たちの方が「先生、大変ですね。ありがとうございます」なんて言っている。私は今の日本の若者は信用してよいと思います。そして、彼らが「私とは?」「この世界とは?」ということ静かに眺め考えることができるような、ゆとりある時間を持った大学教育をめざしたいと考えています。

Mr. 伊藤: もう一度京都の話をさせていただきます。今CMで京都に行こうとしきりに言っていますが、では京都に來られてなにを見ているのでしょうか。例えば大文字焼がありますね、あれを京都人は「送り火」と呼んでいます。仏さまが帰ってこられて、また戻って行くための道を迷わないようにという意味で、とても宗教的な行事なのです。京都観光局は一切関与しておらず、あくまで生活として行っているものです。文化喪失の話がありましたが、文化というのはこのように生活ですから、結局日本人から生活というものがなくなってしまうのだと思います。生活をして初めて文化はその人のものになります。教えてどうにかなるものではありません。

私は現在日本伝統芸術振興会の理事をさせていただいているのですが、今年から小学校に邦楽が導入されることになりました。文部科学省もよくこういうことを思いついたなあと思っています。こういうことをメディアを通して、もっと提議し取り上げていただきたいと思っています。

Ms. 青野: 邦楽を取り入れるお話ですが、安易に邦楽を取り入れることについて懸念しています。邦楽というのは五線で表わせないのですが、学校ではそれを無理やり五線に置き換えてドレミファソラシドで教えているわけですね。でもそれではあくまで“邦楽もどき”です。日本の文化を真剣に考えるのなら、ブームのようにして終わらせてしまうのではなく、一人一人が日本文化を深く掘り下げて、その上で行うに移していただきたいと願っています。



Mr. カー: 確かに、日本文化を教育の場に取り入れる方法については、難しいところもたくさんあると思います。でも私は何十年ぶりかで最近日本に希望を持ち始めているのです。そもそも、“邦楽を取り入れよう”という発想自体が、今までの日本を考えると大変画期的なことなのですから。

Mr. 尺田: とてもゆっくりではあるものの、やっと日本にも新しい風が吹き始めているように感じています。ただ、電線を地下に埋めようという話は私が学生だった30年前からあったのに、実際に動きが始まったのはやっと最近です。日本は既に後がない状況にあるので、できるだけ速やかに対応策を実行していく方法を考えるべきだと思います。例えば、80年代初頭のアメリカが一番元気がなかった時代、当時のカーター大統領が、古い建物を再利用した場合にはむこう5年間固定資産税をなくすといった政策を行っています。京都の街並みの問題でも、ただ京都の街を守れというのではなく、京都を守ることでどのような効果があるのか、そしてそのことで京都の人々が具体的にどのような恩恵を受けることができるのか、それらをはっきりさせたシステムを作ってしまうえば、かなりのスピードで日本も再生していけるような気がします。

Mr. 木原: 私も官僚という立場からあえて反論させていただければ、お役所と聞くとみなさん規制の上にあぐらをかいているという構図を思い浮かべることが多いのですが、経済産業省ではむしろ規制緩和の方向で様々なことが検討されています。例えば、現在電力市場の規制緩和を推し進めています。むしろ事業者がそれに反対しているといった実状があります。また、カーさんの著書の中に、お役所の経費水増しや空出張などの記述もありましたが、少なくとも私自身や私の周囲ではそのような話は聞きません。経済産業省は通称“通常残業省”などと言われていて(笑)、みな朝の2時、3時まで働いています。タクシーで帰る場合も当然相乗りですし、残業代も予算の制約から正規の残業代の一部しか支払われていません。このような実態があることも知っていただきたいと思っています。

しかし、これから日本が大きな方向転換をしていくには、行政でも経済界でも、決定したものを覆すくらいの柔軟な考え方を持つことがさらに必要になってくるのではと思います。日本はすぐにアメリカはどうだ、イギリスはどうだと考えてしまいがちですが、イギリス人の官僚と話をしていると、彼らは今まで前例のないところで仕事をしてきたせいか、納得すればすぐに方向転換できる柔軟性があります。

Mr. 松原: 政治の面から日本を考えれば、大きな問題は日本の税制

—「アレックス・カー氏を囲んで」—

日時：2002年10月11日（金）

場所：国際文化会館 第一会議室

■第一部 セミナー 14:00-18:00

参加者の皆様にカー氏の著書『犬と鬼』をめぐって議論を交わしていただきました。討論は白熱し、18時半を過ぎて終了となりました。本文内容として抜粋させていただきます。

■第二部 夕食会 18:30-20:30

第一部にご参加されたほとんどの方が残られ、さらに新たな参加者をお迎えして夕食会となりました。その間、アレックス・カー氏よりスライド写真を見ながら日本の風景についてお話をさせていただきました。その後も積極的な議論が交わされ、21時を回って会は終了となりました。

にあると思います。私の持論ですが、税制は国民誰もが理解できるようにあるべきです。今の消費税を2倍、3倍にして他の税制は廃止するというくらいでもよいと思います。特に相続税は色々な意味で問題が多い。佐多さんにお聞きしたのですが、イタリアのベルルスコーニ内閣では、今年から相続税をゼロにしたそうですね。

それから文化のことですが、カーさんが再三おっしゃられているように、文化というものは様々な付加価値があります。永田町を見回すと、非常に下品な人間が多い（笑）。しかし、経済を再生するためには、政治家もまた文化を重んじるということを率先してやっていかなければと思います。

Mr.カー：日本の街をだめにした要因の1つは確かに相続税です。国で一律同じ税制というのも問題があると思います。例えば、京都の場合であれば、古い建物を残すのなら税の面で優遇するなど、そういった対策が必要ではないでしょうか。

Ms.横山：文化ということでは、身近なところでは伝統行事がなくなってしまったということもあります。お正月にしても今はお節料理をつくる家庭が随分減ってしまいました。確にお正月の準備は女性にとっても大変な重労働です。しかし、いざ自分がやらなくなってから、あのなにもかもを一新して迎えるお正月の爽快感が忘れられなくて、とても寂しい思いをしました。大変だから止めてしまおうというのでは、日本の文化はどんどん下向きになっていってしまいます。伝統行事を家庭の中で復活させていくことも、文化というものを次世代に伝えていく有効な方法なのではないでしょうか。

Mr.石田：戦前の産業構造を見ても、日本では農業も含めて自営業が50%を占めていました。それが戦後国民の大半がサラリーマンになり、農家でも苦勞して子供たちを学校にやり都会に出すということをしてきました。しかし彼らが定年を迎えたとき、帰るところがない、やることがないということになるわけです。農業を衰退させた要因はここにもあるでしょう。

私は脱サラして20年になりますが、サラリーマンの管理システムというものに馴染めなかった1人です。最近、「個業」(※2)という言葉が出てきましたが、もう一度みんなが「個業」に戻ってみたいらどうかと思うのです。不況になると、みなさんなんだか不安になってやれ経済政策が悪いのだとおっしゃいますが、その前になにか自分でやってみようと考えてもよいのではないのでしょうか。敗戦後私たちの祖父母がやってきたことなのですから、やれないことはないはずですよ。

Mr.カー：今後の日本についてですが、なにかを提案したり運動を

(※1)「東の大観、西の栖鳳」と並び称された日本画の巨匠。明治、大正、昭和の三代にわたって活躍し、多くの俊秀を指導、京都画壇の総帥として君臨した。

(※2) 参考書籍：『大リストラ時代・サラリーマン卒業宣言!』(田中真澄著・PHP文庫)

(※3) これが1979年の松下政経塾の旗揚げへとつながりました。現在同塾の卒業生のうちから21名の国会議員が誕生しています。(2002年11月現在)



起こしたりする前に、まず感じて欲しいと思います。『犬と鬼』は非常に気落ちし絶望を感じる本だと言われます。でも、「だから日本はこうなってしまったのだ」ということが分かってほっとしたという意見をいただいたこともあります。私見ですが、日本は欧米諸国と違って理屈だとか理論だとか政治上での議論などではなかなか結論が出ない国です。しかし、国民の気持ちの部分がぐっと一致したとき、日本は動きが速くなり力を発揮します。だから、多くの人にまず感じて欲しい、思っで欲しい、それが私の願いなのです。

Mr.佐多：今回、私はあくまで場の進行役として参加させていただきました。議論をさらに掘り下げていくにはもっともっと時間が必要だと感じましたが、いつもは書きっぱなし、言っぱなしのカーさんにとってもこのような対話形式の会は大変有意義なものであったのではないのでしょうか（笑）。

あまり知られていないのですが、松下幸之助氏が1974年に『崩れゆく日本をどう救うか』という憂国の書を発刊されており、カーさんが指摘されているような日本の問題点のいくつかを当時既に記していました(※3)。驚くべき先見性だと思います。国内でも日本を見つめ直す機会が実は何度もあったのです。しかし、今回新たにカーさんがこのような本を書かれ、結局日本の文化を守ってくれるのはよい外国人であると、逆説的ですが真理であると思うようになりました。私たちが意外と見過ごしてしまうものを、外国人の目からきちんと見ている方は見ているのです。その意味でも、今後日本はよい外国人が大勢住んでくれるような魅力的な日本にならなければならないと強く感じています。

それでは、これでカーさん（母さん）と、私トーさん（父さん）の会を終えることにいたします（笑）。